

第2回くまもと未来会議 議事録

日 時:平成24年8月21日(火) 15:00～17:20

場 所:くまもと森都心プラザ

テーマ:州都

出席者:五百旗頭 真 委員 (公立大学法人熊本県立大学 理事長)

伊東 豊雄 委員 (くまもとアートポリスコミッショナー)

小野 友道 委員 (熊本保健科学大学 学長)

甲斐 隆博 委員 (熊本経済同友会 代表幹事)

田川 憲生 委員 (熊本商工会議所 会頭)

御厨 貴 委員 (東京大学先端科学技術研究センター 客員教授)

蒲島 郁夫 議長 (熊本県知事)

【事務局】

それでは、ただ今より州都をテーマとした「第2回くまもと未来会議」を開催いたします。私は、会議の事務局を担当しております、熊本県企画振興部企画課の坂本と申します。よろしくお願いいたします。

はじめに、本日まで出席の委員の皆様をご紹介します。

公立大学法人熊本県立大学 理事長 五百旗頭 真 委員

くまもとアートポリスコミッショナー 伊東 豊雄 委員

熊本保健科学大学 学長 小野 友道 委員

熊本経済同友会 代表幹事 甲斐 隆博 委員

熊本商工会議所 会頭 田川 憲生 委員

東京大学先端科学技術研究センター 客員教授 御厨 貴 委員 です。

それではこれより、議長が会議の進行を行います。蒲島知事、よろしくお願いいたします。

【蒲島議長】

皆さん、こんにちは。今日は大変お忙しい中、「州都」をテーマとした「第2回くまもと未来会議」に多くの方々が傍聴に来てくださり、誠にありがとうございます。

まず、本題に入ります前に、先月の熊本広域大水害で亡くなられた方々に心からご冥福をお祈りいたしますとともに、被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げます。今も復旧、復興を進めておりますけれども、この大水害は私にとって、知事になって最初の大災害であります。この大災害において、初めて政治家の役割とは何かということに気がきました。それは、このようなときにどのように対応できるかということで、それが政治的な信頼を確保する一番大きなものではないかと思っています。そこで私は復旧、復興に当たっての3原則を設けました。

原則1は、被害に遭われた方々の痛みを最小化する。2番目は、プロトタイプの、あるいはステレ

オタイプ的な復旧、復興ではなくて、創造的な復旧、復興を行う。3番目の原則が、この復旧、復興を熊本の未来の発展につなげていく。この3原則の下で、今、熊本県は復旧、復興に当たっております。

その一つの例が、木造で仮設住宅を造りましたが、木造で仮設住宅を造ることによって痛みの最小化を図ります。仮設住宅というのは、みんなスチールを最適に思っておりますが、そうではなくてより創造的な建物を造ることができます。そして、将来は熊本から仮設住宅を輸出できるような、そのような対策を取れるのではないかという意味では、発展にも結び付くのではないかと考えております。

さて、今日は第2回目の未来会議ですが、初めて出席される方もおられますので、なぜ、この州都を議論するかということについての私の思いを少し述べさせていただきたいと思っております。

私は4カ月ほど前に、2期目に当選いたしました。そこで、マニフェストの中に「百年の礎を築く」というのを謳っております。この「百年の礎」とは何かと言いますと、我々は現在のことだけを考えて政治を行うのではなく、百年後に何ができるかということを考えながら、今の政治を行うことが必要ではないかと考えています。そして、私は百年後には必ずや、この九州は道州制が実現していると考えております。道州制の議論も、政治的にはこれからますます活発になってくるのではないかと考えております。だから、道州制が決まってから州都を論じるのではなくて、今から、この段階で州都を論じておく方が一番よろしいのではないかと思ひ、マニフェストに州都の構想を掲げております。

熊本は地理的な中核性があります。それから3.11の東日本大震災の教訓というのは、リスクを分散させなければいけないということだと思っています。全てが一つの都市に集まるというのは、とても危ない。そこで、リスクの分散という形から、私は、熊本はワシントン D.C.を目指すべきであるし、福岡はニューヨークを目指したらいいのではないかと考えています。そのようなリスクの分散を考えれば、熊本の州都の役割というのはとても大きいのではないかと考えています。

それからもう一つ、政治には、災害等にどのように対応するかという「対応の政治」と、「期待の政治」があります。経済というのは、期待でもって動きます。そして、州都の期待が熊本に高まれば投資も行われますし、人も集まります。アジアともつながっていきます。そして、熊本県民が州都を目指すことによって、よりレベルアップすることができます。誇りと品格を持つ、そのような県になることができます。そういう意味で、期待の政治の中心の部分に州都構想というものを持ってきたわけでありませう。

そういう中で、素晴らしい方々に未来会議の委員になっていただき、熊本と州都の議論をしていただくことに大変喜びを覚えております。本日は前回の議論を踏まえながら、さらに議論を深めていきたいと考えておりますが、意見交換の前に、私から前回の会議でいただいたご意見の概要について、いくつかご説明したいと思います。

前回の会議では、まず国のキャピタル、首都について、三つの類型で説明がありました。一つはロンドン、パリ、東京のような一極集中型。あるいは、アメリカのニューヨーク、ワシントン D.C.のような、経済的中心都市と政治行政の中心を分離する型。また、ブラジリアのように全く新しく首都

を設ける型の三つです。

私は人口や GDP の規模などからいって、九州は北部ヨーロッパの国々がモデルになると考えています。その中でもオランダは、商業的に反映しているアムステルダムと行政的中心のハーグとに分かれています。ハーグは国際司法裁判所などの国際的な機関が集積しており、世界に誇れる政治行政都市となっています。また、州都には品格が必要であり、オランダのハーグのように外国から認められ、愛され、世界をリードするような国際都市になるということが、熊本の目指すべき姿ではないかというご意見もありました。

それから、州都に必要な要素として災害時の防災拠点としての役割、そして防災拠点として九州各県のみならず、全国に貢献できることが大事ではないかというご指摘がありました。熊本は食料や水が豊富であること、また西部方面総監部があること、そういった強みを十分に生かして、危機管理の中核都市としての部分をさらに強化すべきであるというご意見がありました。

そして、九州新幹線で縦軸でつながった今、熊本が大分や宮崎とつながる横軸のインフラ整備を早急に進めて、九州の中央に位置する熊本の強みをさらに強化することが重要であるというご意見がありました。私はマニフェストの中で、「すべての道は熊本に通じる」と言っておりますが、まさにそのように大分と宮崎とつながることが、今後、大事ではないかと思っております。

幸いなことに、熊本の人たちは非常に強い郷土意識を、また、郷土愛を持っております。そして、郷土に誇りと自信を持って、県民全体で州都を目指していくような、そんな盛り上がりが必要ではないかというご意見もいただいております。以上のようなご意見を踏まえ、部会で整理した「州都構想の骨格案」の説明を、参考資料も併せて事務局の方から説明していただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

【事務局】

それでは事務局から説明させていただきます。

お手元の「州都構想の骨格案」という表題の資料をご覧ください。前回の未来会議での議論を基に整理をしております。「州都構想の目的」「州都選定の視点」「州都の条件」「州都に向けた取組みの方向性」の4つの項目で考えております。

まず州都構想の目的ですが、第1に、州都を目指した取組みで、より品格があり、活力のある県へとレベルアップを図り、さらには九州全体のレベルアップに貢献していくということです。第2に、道州制が実現したときに、すぐに熊本が州都候補となれるよう準備をしておくことにあります。この二つの目的を踏まえ、州都選定の視点、州都の条件、州都に向けた取組みの方向性の3つの項目について、前回のくまもと未来会議でいただいたご意見を当てはめて整理を行いました。

まず地理的な視点からは、州都の条件として交通の便が良く、人の交流が盛んな都市であることが必要と考えられます。本県の現状は、九州の地理的な中枢に位置し、阿蘇くまもと空港、九州自動車道、そして九州新幹線の存在が強みとして挙げられます。今後の取組みの方向性としては、九州の中央に位置する強みを生かすため、横軸交通の充実など、さらに交通の拠点性を高めていくことが考えられます。

次に、行政機関の集積や住民の熱意などの政治的な視点から整理しますと、州都の条件として、州政府が置かれる政治行政の中心であることが必要です。現状でも、本県には国の各種出先機関が多く存在しております。また、本県が中核となって九州全体へ貢献するために、近年観光や地域振興の分野で県境を超えた連携を推進しているところです。さらには住民が自信と誇りを持っていることが必要と考えられますが、住民の皆さんには強い郷土愛があります。今後の取組みの方向性としては行政機関の集積を生かし、多極型の九州における政治的な中心を担い、九州を代表する国際都市を目指していくこと、また、住民の皆さんの中で州都の議論を盛り上げて、州都に向けた取組みを県民運動としていくことが考えられます。

次に、防災などの危機管理的な視点からは、州都には危機を管理する基盤があり、州内全域を支援できる高い能力が必要と考えられます。本県の現状としては、豊富な水と食料、九州の危機管理を担う陸上自衛隊西部方面総監部の存在、また適度な人口密度や、熊本駅が市街中心部から離れているなどの危機管理上有利な特徴があります。今後の取組みの方向性としては、例えば危機発生時に直ちに九州各地へ支援ができる体制を整備するなど、危機管理の中核機能を充実させていくことが考えられます。

最後に、都市の雰囲気など暮らしやすさの視点では、品格ある都市であること、教育の充実などが州都の条件として考えられます。本県には熊本城を代表とする加藤・細川400年の歴史と文化があります。また、時習館や五高以来の教育の土壌があり、多くの大学などが集積しています。今後の取組みの方向性としては、この歴史と文化をさらに磨き上げていくとともに、教育においては、知の集積と全体のレベルアップに取り組むことが考えられます。

以上、前回の議論を基に州都構想の骨格案として整理をいたしました。次のページをご覧ください。参考資料といたしまして、道州制に関する最近の動きをまとめております。なお、このページの右側には直近の県民アンケート結果を記載しました。道州制に関しては、まだまだ県民の理解が進んでいるとは言えませんが、経済活性化などの期待、そういったものがあるようです。資料についての説明は以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは意見交換に入りたいと思います。

議論の進め方ですが、まず最初に、前回にもいただきましたが、熊本が州都を目指す上で必要な条件などについてご意見をいただきたいと思います。前回ご出席いただいた委員におかれましては、話し足りなかった点なども含めてお願いします。

そして2巡目で、今、事務局から説明がありました州都構想の骨格案などをもとに、州都に向けた取組みの方向性などについて、具体的な案なども含めてご意見をいただければと思います。

まずは今回初めてご参加の伊東委員、甲斐委員、御厨委員から、皆さまが考えておられる州都とは一体何か、州都にふさわしい要素は何か、またその中であって熊本の強みなども含めて、幅広く自由にご意見をいただきたいと思います。時間が限られておりますので、一人10分ほどでお願いしたいと思います。まずは伊東委員から、よろしくお願いします。

【伊東委員】

よろしく願いいたします。まず最初に、知事もおっしゃいましたが、今回の水害で被災された方々に対して心からお見舞いを申し上げます。先ほど、知事から木造仮設住宅を造られ、それを未来の発展につなげるというお話がありまして、大変驚きましたと同時に素晴らしいと思いました。後に、それに関連したお話もさせていただくと思いますが、この木造で仮設住宅を造るというのは、本当に大賛成です。

前回失礼してしまいましたが、議事録を読ませていただきまして、そこで蒲島知事が「県民の幸福を最大限にしたい」ということをおっしゃっておられました。それからまた、坂東委員がそれに関連してブータンの例を引かれて、GNH ということをおっしゃっています。つまり、Gross National Happiness(国民総幸福量)。この幸福という言葉は普段我々もよく口にしますし、オリンピックの金メダルを取った選手なども「最高の幸せ」ということを言いますから、つい聞き流してしまう言葉ですが、私はこれが、実は熊本が州都になるために非常に重要なキーワードではないかと思います。つまり我々が考える大都市、特に私のように建築をしておりますと、やはり東京のような大都市をずっと頭に描きながら建築を考えてまいりました。東京のような大都市は GNH に対して、GNP、GDP という言葉を掲げながら都市の発展を考えてきました。そうではない価値観、それが GNH であり、経済発展を至上とするような考え方に対して、幸せをベースにした価値観に基づく街、あるいは州都とはどういうものだろうかと、ここで真剣に考えてみるのはとても有意義なことではないかと思います。

私は今年の3.11以降、かなりの頻度で三陸方面に通っておりまして、そういう Happiness ということを考え始めたのは三陸に行ってからです。具体的に申しますと、今回、政府の方針は安心、安全のための高台移転と、今まで以上の防潮堤を築くことが基本的な方針になっておりますが、現地の皆さんの話を聞くと、必ずしもそれが望まれてはいません。元気な人ほど「また元の所に戻って住みたい」、あるいは「元の所に戻れなくてもできるだけそこに近い所で住みたい」と、皆さんおっしゃっています。「それはどうしてですか。」と聞くと、ほとんどの方が「昔の仲間と一緒に住みたいから。」と言われるのです。被災したにも関わらず三陸の人たちは、自然とつながった所で生きたい、人と人との心がつながった所で生きたい、このことを最大の価値にして生きてきたのだということを、私は去年、強く実感しました。僕らもコミュニティーや共同体ということは簡単に言いますが、その人たちの言葉を聞いた時に、私が考えてきた価値とはまた違った、もっと本当に自然や人と人とのつながりを大事にしながら生きてきた人たちがここにいたのだ、ここから何か新しい未来の日本の一つのモデルができるのではないかと思い始めたのです。

そして、これも後でお時間があればお話ししたいと思いますが、それが熊本の人たちと心をつなげることもなったという出来事が具体的にございます。この Happiness、幸せということ突き詰めていくと、人と人との心がつながっている、そして人と自然とがつながっている。これは、経済をベースにした大都市では失われたことであり、また、経済をさらに発展させるためには、一層共同体は失われて個人に還元されていく、そして自然との関係を絶てば絶つほど効率が良くて機能的な街になっていく。そういうことを考えたときに、この経済に対する幸せという言葉の一つの価値観

に据えて、どういう街がこれからあり得るのか考えてみるといいのかなと思いました。

一つの例をあげますと、私が具体的に実感しているのはスペインのバルセロナという都市です。私は、2002年以来、ちょうど10年前にバルセロナにオフィスを持ちまして、そこで国際見本市の会場をつくり続けております。皆さんもご存知のように、バルセロナはマドリードに対して非常に意識的であり、マドリードが経済、政治の中心であるとする、バルセロナは芸術、文化の中心です。そしてまた、青い海と青い空といったように、世界中から観光客が大勢集まります。ガウディの建築がたくさんありますし、ダリ、ミロ、ピカソの出身地でもあります。これはもともとバルセロナが独立運動をしていた時に、芸術を媒体にしながらその運動をやってきたという歴史とともにあるわけです。バルセロナのような都市は、熊本なら可能なのではないかと思うのです。青い空と阿蘇と、そしてきれいな海。ですから、観光客がやってくる魅力がそろっています。

実は私が親しくしております、フランス大使館のフランス人の職員が、「フランスの大使館にいる人たちはみんな、毎年休みになると熊本に行くんですよ。」と言うわけ。「京都ではなくて、なぜ熊本なのか。」と聞きましたら、フランスは農業国ですから、阿蘇のような雄大な自然の方に憧れるということもあるでしょうが、「熊本城に行ってお茶をたててもらおうというのがすごく楽しみです。京都に行ってお茶をたててもらおうとお金を取られるけれども、熊本だったらただお茶を入れていただける。」と言います。これは有料か無料かという問題ではなくて、そこに心があるからだと思いません。

ですから、バルセロナのような観光都市では、国際会議、それから国際見本市、そういうことが絶え間なく行われるわけです。そういうことを一つの手掛かりにしながら、熊本の未来を考えてみてはどうでしょうか。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは甲斐委員、お願いします。

【甲斐委員】

経済同友会の甲斐でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

私も前回欠席をいたしましたので、伊東さんと同様に前回の議事録を読ませていただきました。その議事録を読んだ私の理解について、まずお話をさせていただきたいと思ひます。

幸福を実現できる熊本という知事の目標を具体化するために、4つの目標を知事は設定していらっしゃるんですが、この「百年の礎を築く」という目標が、この未来会議の根底にあるものであり、その前の3つの目標、いわゆる「活力を創る」「アジアとつながる」「安心を実現する」という、この3つの目標を連動させて、大きな方向感と枠組みを示す上位概念が「百年の礎を築く」という目標ではないかと思ひます。さらにこの目標は、活力、アジア、安心という3つの目標の実現度合いを検証する視点を与える概念でもあるということで理解いたしました。そして、百年の礎というテーマは、往々にして理念的、精神論的な議論になる可能性がありますが、そのテーマに具体性、現実性を持たせるために、いわゆる道州制や大阪都構想などに見られるような、分権や特別権限によ

る地方自治構想を飛び越えて、州都という実現可能性を具体的にイメージできるテーマを知事は設定されたわけであります。この辺りが、飛び越えたということが知事らしいと思います。

そして、その州都というテーマ設定の有効性なのですが、州都を目指すということは政治的意思決定機能を、周辺の賛同を得て熊本に誘致するということでもあります。ですから、いわゆる道州制、あるいは新たな自治構想の実現を前提にしているわけですが、分権は資源の再配分と所得の再分配をもたらす重要な機会であるという認識が、まず必要ではないかと思えます。そして経済的に見ますと、意思決定機能を持ちますと周辺に第三次産業の裾野が広がりまして、都市としての存在感と安定感が増してくると思います。世界の主要都市のほとんどが、第三次産業の集積によって形成されているという事実から見ても分かると思います。東京の強さというのは、あらゆる分野の意思決定を集中しているというところにあるわけでありまして、その集中度合いが東日本大震災以降、業務として問題ではないかというふうに考え方が変わってきているのではないかと思えます。ですから、資源と権限を分散するという意味での分権は、日本全体の改革の重要な課題でありまして、知事のおっしゃる州都という地域づくりによって、分散と分権を、地方に住む我々が考えることは十分に意義のあることではないかと思っております。これが私の議事録を拝見した感想です。

次に、州都に向けての環境の認識という観点から少しお話をさせていただきたいと思えます。まず我々が考えなければいけないのは、人口減少社会トレンドへの対応ではないかと思えます。九州新幹線が昨年開業いたしました。九州新幹線を熊本に持って来ようといった動きが具体的に始まったのは、平成4年です。それが今、平成23年に開業いたしましたので、丸々20年かかってようやく新幹線は通りました。しかしながら最近のメディアの報道にもありますように、当初の構想が完全に実現するには、まだまだ、平成30年以降まで時間がかかります。ですから、いったん描いた大きな構想というのは、おそらく30年ぐらいのタームで考えていくことが必要なのではないかと思うわけです。この人口減少トレンドを30年後、2040年というその時代の人口を考えますと、現在熊本が181万人でございますが、それが2040年、30年後には143万人になります。38万人減少するわけです。これは人口分布状態を調査している国の機関の数字であり、中位推計ですので、確率としては高いのではないかと思えます。そして九州は1300万から1千万ちょっとになります。約270万人減少いたします。このようなトレンドの中での州都というのをどう考えるか。いわゆる地域づくりをどう考えるかといったようなことが非常に重要です。ですから州都を目指し、州都を誘致するという事は、熊本が流入人口の増加によって、あるいは州都を認められたということで、新たな産業が興ることによって雇用機会が創出され、結果として所得が上がり、そして婚姻率、出生率が上がって人口の減少に歯止めがかかるという、そういう効果が期待できるのではないかと思うわけです。

それともう一つ、幸福な熊本づくりということであるならば、一人当たりのGDPを今以上に下げるといことは、やはりかなりリスクが伴うと思えます。ということは、一人当たりのGDPを今以上に上げるためには、やはり何らかの形で、州都が呼び込んできた新たな産業群を活用した産業政策というのを考えなければいけないのではないかと。つまり、経済的な裏付けを確保していくという

考え方が、州都を呼び込むに当たって大事なのではないかと思います。どういふ新しい産業が期待できるか例えて申し上げますと、意思決定機能の周辺にはいわゆる情報サービス産業であるとか、あるいは映像、文字、文字情報制作産業といった、そういう知的な知識集約型の産業が立地する可能性があるということです。そういった経済的なメリットと、先ほど申し上げました婚姻率、出生率の上昇によって若さが作られるといったようなところが非常に魅力なのではないかと思います。

それと2番目の環境認識についてですが、人口構成が大きく変わります。変わる可能性があるということです。それはどういうことかという、いわゆる戸籍と国籍が多様化するということです。戸籍ということは熊本県生まれの方々だけではなくて、いろいろな所からいろいろな方が入って来られるということと、いろいろな外国人の方が入って来られるということです。ですから、このような、いわゆる人口構成の変化に対しまして、閉鎖的で特殊なという受け止め方がないような地域社会づくりが必要なのではないかと思います。それは、オープンで標準化された生活圏の形成といったような観点が重要ではないかと思います。

それと3番目でございますが、これは先ほど伊東さんがおっしゃられたのと全く同様に、自然と人間の調和といったような観点を、より前面に出すということが今後の都市づくりには非常に大切ではないかと思います。品格は損得勘定だけからは生まれません。自然を愛でるといふ、そういう姿勢が非常に重要であると思います。そんな中で、これは少し先走った発言になるかもしれませんが、州の行政機関の設置場所といたしまして、私は200ヘクタールぐらいの森林や作物を栽培するような田畑や、あるいは芝の公園をちりばめたような土地に、できればその森林よりも低い建物を点在させたような、森と緑に囲まれた州都の設置場所を期待したいと思います。それが百年の礎につながるのではないかと考えております。1巡目の発言は以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、御厨委員からお願いします。

【御厨委員】

御厨でございます。それでは、前回私も欠席をしておりましたので議事録を読ませていただきましたし、先ほどの知事のお話も伺いましたので、とりあえず三つの点で申し上げたいと思います。

一つは地図の上で考える。もう一つは近代史の中で考える。三つ目は個人史のもとで考えるという、この三つであります。私が地図と申ししたのは、熊本を州都にしたいという話のときに、それでは九州全体の中で熊本というのはどういう位置にあるのだろう、それから今度は日本全体の中で九州というのはどういう位置を占めているのだろうかというようなことを縷々(るる)考えまして、地図帳を開けてみました。地図を見ることはそんなに嫌いではありませんが、その中でふと思いついたのは、考えてみるとこの国で、この日本列島全体をどうするかということについては、戦後かなり長い間、十年おきに考えられてきたということです。それはいわゆる全国総合開発計画というもので、これが1960年代から10年ごとに、一全総、新全総、三全総、四全総、五全総ときて、それが21世紀になるときにおしまいになりました。つまり、これは何を意味しているかと言うと、日

本全国の、しかもそれは東京を中心にして全国の総合開発を考えるという考え方は、もはや駄目だということが21世紀に入る時点で分かったわけです。私は、いち早く蒲島さんが知事として、州都というのをとにかく思考実験としてもやってみようというのは、これは21世紀がある意味で分権の時代だとすると、地方から考える、あるいは九州から考える、あるいは熊本から考えるという意味で、非常に意味のある構想だろうという気がしました。全総なき後出てきたのが州都であるというのは、その点で非常に象徴的な感じがいたします。

同時に日本列島と申しましたけれども、この地図というのも精密、正確な地図を見るのではなくて、地図全体を、それこそいろいろ動かしてみることが大事です。新全総というのを1960年代の後半に下河辺淳(しもこうべ あつし)という人が作った時に、実はそこに日本列島の地図が描かれていました。日本列島の地図が描かれているのですが、面白かったのは、通常の世界地図よりは九州と北海道が何となく近いような感じに曲げてあるのです。丸くなっている。わざとそうしたわけでありまして、要はあの時には時間と距離は、交通網の発展によって、むしろ逆になっていく。近い所が遠くなり、遠くにある所が近くなるというような発想があったものですから、日本列島を丸くするというあの地図は、非常に私は印象的でありました。そういうことを考えたならば、では九州の中で熊本というのを、もう少し地図をいじってみると面白いことが出てくるのではないかと。つまり、県境というのは絶対的であるように考えていますが、あるいは国境も絶対的だということに考えていますけど、意外にボーダーというものを超えてみるのは思考実験では面白いと思います。私は、熊本の地図をもっと面白くいじってみると、なかなかいいことが生まれてくるのではないかと気がします。

もう一点申し上げておきますと、例えば1960年の段階で東京湾の埋め立て構想というのがありまして、東京湾を全部埋めようという構想があったのです。それを推進したのは加納久朗(かのうひさあきら)という、元の千葉県の大塚様ですが、かの大塚様は、自分の房総半島を半分ぐらい爆弾を使って爆破して、要するにその土を全部東京湾に埋めて、そこを開発するという発想だったのです。とても考えられない発想ではありますが、やがて加納さんは、その後千葉県の知事になって、それをやろうとしたかどうか知りませんが途中で亡くなってしまったので、それは永遠の夢になりましたが、そんなことを考える人がいたのだということです。こういう破天荒な発想というのが、やはり今は必要なであろうということです。

2番目に歴史の中で考えるということをごさいますと、前回のお話、議事録の中にもありましたが、熊本は人材、特に知事は知的な、要するに知の集積ということをおっしゃっています。この人材という点で考えると、この近代史の中での熊本の意味というのは、従来あまり意識されてこなかったことなのですが、実は非常に多様にあるということです。一例を挙げますと、それはいわゆる五高のことです。五高というのは、旧制高校の中でもかなり独自の位置を占めています。他にもその後にはできますが、九州に五高というのは最初はもちろん一つしかなかった旧制高校でありますし、その出身者、あるいはその家の人の集まり方というのは、他の高校と比べてときに違いが見えてきます。私は、去年、放送大学のロケでここに参りまして、一つは田原坂を見たかったということと、もう一つは五高記念館に行って徹底的に五高人材というのを洗ってみたいことがございます。そうす

ると、戦後のいわゆる各省の次官クラスというのは、大学で見ていくとよく分かりませんが高校出身で見ると、意外に五高出身というのが多いのです。彼らがいろいろなことをするに当たって、それぞれ連絡を取り合っているというのも見えて参りました。

みんな、どこの県出身であるとか、どこの大学を出ているかというところで、戦後の近代史は切ってきたものですから、そこが見えませんでした。旧制高校で切っていくと、五高の場合はそこがつながって来ます。五高が生んだ有名人の最大のものは、実は60年代の日本を支えた池田、佐藤なのです。池田内閣と佐藤内閣というの、これもまた非常に面白いのですが、池田さん自身はかなり五高ということ意識していて、調べてみるとこの時代、池田、佐藤の両内閣を称して五高内閣と呼ばれます。これは単に総理が五高というだけではなくて、池田さんがはっきり言っていますから、私は大したものだと思いますが、「自分は内閣改造のために五高出身の人間を3人は入れた」と。今こんなことを言ったら、たぶんとても怒られると思いますが、池田さんがあの頃言ったら、みんな「えー」と思って、それくらい五高はすごいんだというふうに書いてあります。おそらく、池田さんはおそらくそれを意識して入れたのだと思います。

やがてその池田、佐藤、この両人の内閣が終わるあたりから、実は五高の同窓会組織というのが非常に強く作られていきます。もちろん、いろいろ便りも出しますし新聞も出しますし、それから事務局も作って頻りに集まる会合をしています。その中で、五高出身というのはご承知のように戦後は出ません。戦後はもう高校がなくなってしまいますから。でもその残りの人たちが、彼らの五高出身であるということ非常にうまく使って、ある種の暗黙知を作り出していくというような努力はしたようです。このことから言っても、熊本という地域で一度は学んだ人たちが外でつながっていくという意味で言えば、県境を超えて、ボーダーを超えて活躍してきたという歴史があるということです。従って、地元で教育をするということは自由であると同時に、それが日本全体の指導者を生んでいきました。その経緯を、九州の中で唯一持っているのは熊本であるということを私は言いたいというのが、第2点です。

そして第3点、個人史のもとで考えるということで申しますと、私は今はずっと東京で暮らしておりますが、御厨という名前自体が佐賀に多い名前、私の父親も佐賀の御厨の出身です。それから私自身は、実は小学校時代の6年間というのは、父親の会社の転勤がありましたので、福岡で暮らしたことがございます。ですから、九州というものに対する、関係性というのは何となく深いのと、そして最後に申し上げますが、私の母方の祖父は熊本、阿蘇の外輪山の久木野村の出身で、その後、五高を出て司法大臣になったという経緯がございます。ですから熊本についても、そういうご縁があるということの中で、これからまた州都という問題について考えていきたいと思っております。以上、3点であります。

【蒲島議長】

どうもありがとうございました。それでは、五百旗頭委員からお願いします。

【五百旗頭委員】

ありがとうございます。前回話しましたので、今日は出てきても言うことがないかと思いましたが、皆さんの話を聞いているうちにいっぱい言いたいことが出てきました。時間をオーバーしないようにしなくては。

東日本大震災が起こって1カ月ほどした時に、私は初めて現地視察いたしました。本当にひどいと思いました。宮城、岩手の入り江の町々が、がれき以外の何もなし。これほどかと。テレビで見るよりも、やはり現場に立つと違いますね。本当に何もなくなってしまうんだ。ぼうぜんたる思いでした。そして、ちょっとうれしい話で、陸前高田の丘の上に最初の仮設住宅ができたから見てほしいと案内されました。そして見に行つてがっかりいたしました。これでは阪神淡路の失敗と同じではないか。プレハブがダーツと並んでいるんですね。それができた時はうれしくて、みんな競って入るんです。けれどもその中で、やがて孤独死、自殺が起こっていく。それをまた繰り返すのか。幸い、やはり後ほど学習するというのがあって、陸前高田は大急ぎで造ったからそうせざるを得なかったけれども、それ以外に、割と工夫を凝らしてコミュニティーセンターというものを中心に置きながら造る仮設住宅も、後に見ることができたのは良かったです。

実は昨日、阿蘇の方に7月12日の大災害の跡を見に行つて参りました。そしてうれしかったのは、蒲島知事が言った、やわらかい木造の仮設住宅ができていたのです。玄関入口横の所に縦に天井までの木の板目を作って、全体に暖かいですね。やっぱり熊本はちゃんと学習して、多くの被災地の繰り返しとは違うことをやってくれたと思ってうれしかったですね。昨日は他にも大変うれしいことがありました。昨日の午後1時に、57号線の土砂崩れで道が不通になっていた所に仮の橋ができて開通し、その直後に参りましたので、57号線、40日にして復旧というのを自らそこを通つて確認するという機会を得ました。

それは大変結構であります。やはり、気になる点もあります。第1回目の時に、私は総合安全保障という観点で熊本がいろいろな意味での安全保障の拠点となる可能性があるとして申し上げましたが、事務局の方で示していただいた一覧表で、「危機管理的視点」という言葉は少し硬すぎると思うのです。これは「安全、安心の源としての熊本」とか、そのように言ったほうがいいと思うのです。ここに書いてある、水、食料、総監部等々に加えて、医療水準ということも非常に大事だと思います。これは人間の安全保障に関わることです。

それから交通機関についてですが、やはり国造りの骨格としての基幹道がこれら防災安全上大事です。熊本の場合、南北軸がしっかりして、東西軸が弱いのです。これも知事が昨日、国土交通省の方に促進を要請しにいらっしゃったと先ほど伺いましたが、阿蘇へのルート、阿蘇から大分に抜けるルート、これが非常に弱くて、57号線1本です。大津の辺り、そして阿蘇の外輪山の二つに分かれる所までは、今、片道2車線、計4車線への拡幅工事をやっています。これは不可欠なことです。しかし、その後は片道1車線でトコトコ行かなければいけない。特に外輪山を上るあたりになると非常にもろい。これほどの雨が20～30年に1回は降るのでしょうか。平成2年の時には1千億円の被害を出したわけですから、今度は金額で言えばそれほどではありません。それはどうしてかと言うと、雨量が前より少なかったのではなくて、国土の強じん性ができてきているわけ

です。前の1千億の被害を出した後、1千億かけて強くしましたから、被害額は今度はやや少ないのですが、それでもこういうのが20～30年ごとにやって来ます。地球温暖化の中でもっと頻繁かもしれない、そのたびに道路寸断ということになると、基礎的な安全の骨格ができてないということなのです。南北は新幹線ができ、高速道路ができて大丈夫です。しかし横軸、これがしっかり通らなければいけません。阿蘇を経て大分に抜けるその根幹として高速道路で通すということは、県民の安全、あるいは県が他と結びつくという点で非常に大事だと思います。

前回の安全保障のことを付け足すように申しておりますが、もう一つ、陸前高田の市役所は3階建ての立派なビルで、しかも海辺ではなくてかなり内陸に入った所がありました。なのになんと、3階の屋根まで津波で沈んでしまいました。屋上に逃げた人の多くが亡くなりました。市長は幸運にも、屋根の一角が屋上からさらにブルーの尖った屋根になっていて、その上にいた若者に腕を引っ張られて引きずり上げてもらって生き延びたのです。それほどすさまじい状態でした。市役所が沈んでしまったというのでは、もう最初からどこに災害対策本部を作るのですか。全く救援と復興の足場がないのです。それに対して、大船渡市は市役所が丘の上に、ある時期移転したのです。市民から非難を浴びました。「なんだ、あんな高い不便な所に上がって。我々、市役所の用務をたすのに山登りをしなければならぬ。けしからん。」と文句を言われました。しかし、このたびの災害で無事だったというので、災害対策本部、復興の指揮所としてしっかり機能したのです。市長ももちろん無事でした。

そういうことを考えますと、九州の県庁の立地も気になります。自らが安全であるものだけが人を救い得るのです。安全基盤を持っているのでしょうか。全国の47の都道府県庁の標高一覧を、ここに県立大学のスタッフが用意してくれました。47位は鹿児島県で標高1メートルに県庁があります。そして次が福岡市。標高2メートルの所に県庁が建っているのだそうです。大分と佐賀は標高3メートルというので、最も低い所に県庁が建っているのが、九州ではどうしてこう多いのでしょうか。そういう中で、九州の中で一番高い所に県庁があるのが意外にも熊本県庁なのです。熊本県庁、江津湖、水前寺公園は、結構低くて10メートル以下に違いないと私は思っていたのですが、熊本県庁は標高16メートルもあるのです。そういう意味で、全国的に見て安泰な所にあります。

そういう所に拠点を置いて、しっかりと安全の対処をする中心になってほしいというお話を前回申し上げました。今回申し上げたいのは、蒲島知事がおっしゃっていた品格の方に近いかと思うのですが、いろんな意味で安全保障上の諸条件があるというのに加えて、それ以上に大事なものは心でありました。つまり熊本県が、徳があるかどうか。九州全体のケアができるかどうか。つまり結局、人望、信望ができるというのは良き世話役ができるかどうかということだと思っております。そのためには、自らあれをやりたい、これをやりたいとともに、周辺の各県が何を望んでいるかということが分かっているなければいけません。そういうのを知って、それと連携してフィードバックをしていく。周辺県のやりたいところが、熊本県にとってもやはり望ましいことであれば一緒に手を組んでやりましょう。特に必要ではないけど、悪いことじゃないという場合には、いいじゃない、やりましょう。不都合であれば、特に関与しない。そういうお世話をし、役に立つという協力関係を作っていく。地域や九州全体の意向を明らかにするプロセスをリードすることができるかどうか。

熊本が九州の中心ということになると、先ほど御厨さんが言った、時間の距離による地図などというのが、本当に面白いと思います。

同時に、心ですね。自分たちの必要なことを良く受け止め、一緒にしてくれる熊本という内容と、いいですか、通い合いが出てくればそういうのに基盤ができてくるのではないかと思う次第です。どうもありがとうございました。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、小野委員からよろしくお願いします。

【小野委員】

この前は1点だけ、防災センター、特に感染症のセンターをお願いしますということをひたすらお話ししました。私はやっぱり、この前の阿蘇の防災もありますし、もう一つ、安心、安全の観点から極めて重要なのですが、あまり作ることを一般には歓迎されない施設を造ってほしいなと思っています。それは、先ほど五百旗頭先生が言われた九州全体のケアにつながりますが、九州司法・行政解剖のセンター、加えてこの教育研究センターを造ってほしいと思っています。特に、防災センターの横ぐらいいればいいと思います。

今、ご存知のように大学の法医学教室は、法医学の学者が新潟のトキよりも絶滅危惧種であります。ほとんど法医学の専攻を希望する人がいません。大学でも教授がなかなか選考できない状態にあります。そこにもってきて、変死などの異状死体がどんどん増えています。2010年で17万1千程度です。ところが、その異状死の解剖の実施率は11%です。つまりほとんど解剖されないで、いろいろな処理がされているのです。熊本県警では7.1%。全国よりもさらに低い状態です。大学の法医学教室に頼んでも、それを処理する能力がもう無理な状態です。そこで、もうそういうことは大学に頼る時代ではありません。九州全体の知恵を集めて、人材を集めてようやく1カ所できるくらいだと思いますので、これは本当は国の機関として造ってほしいのですが、その解剖ができるセンターを造ってほしいと思っています。東京みたいに監察医制度があるところでも23%ですが、その半分以下だということですし、一方欧米は50%を超えているのです。文化国家で安心、安全を謳うならば、やっぱりここは少し地味ですけども、これは州都にあるべきではないかと思っています。

ただ、いろいろなことを調べてみますと、法医学会でも、死因究明医療センター構想を持っていますが、どうにもお金がないので動いていないという状態ですし、最近、政府でも法医学研究所を造ろうとかいう構想があるらしいです。今、熊本に蒲島知事のお力でそれを持ってきて、こういう地味なことも州都でやるのだと、熊本は積極的にやるのだという意気込みを示していただければいいかと思います。そこは病理解剖医も手伝いができるでしょう。しかし、何よりも人材を養成する機関としても機能してほしいと思います。技術者とか秘書とか、大学の法医学教室には誰もいない状態ですから、そういうのをきちんとセットで組み合わせて造っていただきたいと思っています。

僕が熊本大学の医学部時代に、1980年代エイズの症例をどこで解剖するのか、病理学者の

ある人はためらったりしました。しかし結局は、ちゃんと機能して熊大医学部で解剖しましたが、そういうわけの分からない異状死体、感染症を含めてそういうのを熊本でできるという能力、それを構築するのは州都構想の中の重要なことだと思います。法医学者がきちんとネットワークを作って集まってセンターがあるということは、実は防災、あるいは災害の後に極めて重要なことです。阪神淡路大震災の後、僕はある学会で法医学者の教授の講演を聞きました。「なぜ法医学者をあの時集めなかったのか。6千を超える死体があるのに、死体検案を臨床の医者がしないとうにもならない状態だったのです。全国の法医学者を集めていたら、死体検案はスムーズにいったのではないかと思います。」と言われたのです。それで僕は愕然としたのですが、今回の3.11のときは、法医学学会もそれを受けて活躍されたそうでありまして、大災害のときの死体検案をどうするかということも、また極めて重要です。こういう地味ですが、極めて重要な国の施設を熊本の州都構想の中に入れておくというのは、感染症センターと併せて、私は極めて重要だと思います。

2回目に少し観点を变えて話させていただきます。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、田川委員からお願いします。

【田川委員】

商工会議所の田川でございます。よろしくお願ひいたします。

私も五百旗頭先生と同じで、前回結構話しまして、何を話そうかなと思って参りました。前は5月27日でした。今日が8月21日です。この間に何があったかということ、次のテーマに結びつける意味から少しお話をして、私なりの州都の取組みを展開したいと思います。

まず非常にショッキングな情報としましては、7月に国の中央防災会議が、首都直下型地震と南海トラフ巨大地震の発生を想定した対応策の中間報告をいたしました。これは皆さん方もお読みになったかと思いますが、その中で政府の業務継続のための代替拠点として、全国で大阪、札幌、仙台、名古屋、福岡、この5都市を挙げています。ここに当然のことながら熊本は入っていません。先日、福岡の経済界の方とこの件について話をいたしました。そうしたら、福岡は早速これを受けて、九州大学の跡地の箱崎、今、医学部はずっとここにありますが他の学部は移転しています。広大な跡地があるので、ここに、この政府の代替の業務継続のための拠点を誘致しようと、今、福岡の経済界は動き出したという話です。これは中央防災会議での視点で、道州制とは全く違うように思いますが、仮にこれがなされると、相当の既成事実となります。他の所は、先ほど仙台の話もありましたけれども、名古屋とか、そうだなという所はあるのですが、九州で福岡となりますとこれが既成事実化して、いざ道州制になった場合に、そのままそこには国の出先機関等が集約されるかもしれません。そうすると、そのまま自然な形で州都がここに移行されるということで、僕が、熊本が州都を目指す意味で非常に注目をしたニュースでした。

それから7月31日に、鹿児島、宮崎、熊本、南九州3県の商工会議所の交流会議をしました。3県の正副会頭が集まって意見交換をしたわけですが、その中で一つは3県で何をするかという

話で、3県とも利害が一致する観光をしようということになりました。私もそれは賛成したのですが、3県でそれぞれ意見が違うことも言い合っているのではないかと提案したら、道州制の話に移りました。みんな言いたくも言えないのです。州都を自分の所という思惑を各県全部持っています。その中で、まず鹿児島は非常に中立的な発言しかしませんでした。宮崎の会頭は、南九州3県で道州制をしたらいいのではないかという話をした上で、もともと宮崎というのは、高千穂を含め日本を創った拠点である、だから、宮崎が州都だという展開をされました。熊本が州都について、今動き出しているということを言いましたら、全体的に何となく冷たい雰囲気がサーッと流れたというのが現実です。

三つ目の動きとしましては、福岡で経済4団体の暑気払いが同じ7月にありました。九州全体の経済人などが500名ぐらい集まりました。ちょうど知事も出席予定だったのですが、北部九州大水害で出席できませんでした。懇談になって、「いや、去年はね、この会に熊本の蒲島知事が来られて挨拶をされて、なんと熊本に州都をと言っていたよ」という話を耳にいたしました。つまり、他県から比べて、先ほどの御厨先生の話ではありませんが、あるいは甲斐さんの話ではありませんが、破天荒なことを、今、熊本はやろうとしている。それは、僕はそれでいいと思うのです。その破天荒なことにチャレンジするというのが、まさに蒲島イズムかなという気がいたしております。ただ、そういう現実が、前回の会議から今日の会議までの中で体験したことです。

そういうことからしますと、今日資料をいただきました州都構想の骨格案で、最初に「州都構想の目的」と書いてあります。「州都を目指した取組みで、より品格があり活力のある県へとレベルアップを図り、さらには九州全体のレベルアップに貢献」とありますが、悪いですが、これこそまさに他県から見れば、熊本のエゴにしか取られないと思います。先ほど五百旗頭先生もおっしゃいましたが、他県から尊敬される熊本でなければ、まずできません。この段階で、それぞれでやっぱり州都というのは、自分の所にと思わない知事はいないのです。そういう中で、破天荒で旗を振り上げて突っ込むというのは、僕は賛成ですが、その際に、あえて相手に刺激を与え過ぎる必要は全くないという気がします。そういう意味では、こういう地域エゴに取られかねないような表現はびっくりしました。

これは、例えば福岡の経済人と話をしましても、一番彼らが「うん、そうだね」と言うのは、この資料の「取組みの方向性」の中で、「一極集中ではなく多極型の九州における政治の中心」とありますが、九州は多極分散の発展をいかに進めるかということ、僕は前面に出すべきだという気がします。これを言うだけで、熊本はグッとクローズアップされます。つまり経済の中心が、今、博多でありまして、九州の多極分散型を推進すべきであり、つまり、日本の東京一極集中の弊害をなくすということと同じで、九州でも福岡一極集中を進めるべきではないというのは、九州各県が賛成すると思います。それから先ほど、防災の視点からいろいろ熊本の州都の有効性について論じられておりますが、まさに危機管理の面からも、経済の中心地と、行政の中心地は分散すべきであるという、これはもう、大義名分で誰も文句を言えません。これを徹底して主張していく。それが、戦略的には一番他県から批判を受けないし、すんなりとした形で受け入れられると思います。

もう一つは、これは前回、非常に僕も強調したのですが、他県のために汗をかき、知恵を出し、

そしてお金も出すということが大切です。特に宮崎、大分、長崎との横軸の高速道路等のインフラ整備、そういうところを徹底して一緒になって汗を流す。そして、熊本がやってくれたおかげでこの道路が完成したねと言われて初めて、熊本が感謝され尊敬される立場になってくると思います。重ねて言いますが、九州の多極分散型を言えば、福岡は何も言えません。多極分散型の発展と防災の観点から、僕らはこの2つを戦略として考えていこうではないかと思えます。以上でございます。

【蒲島議長】

ありがとうございました。

一応、皆さんからご意見を伺いましたけれども、もう1巡させていただきたいと思えます。やはり一人10分ぐらいでもう1巡したいと思えますが、できれば「州都構想の骨格案」というのがここに出ておりますが、それに沿った形で具体的に取り組むべきこと、また、それに限らず、これだけは言っておきたいというお話もありますので、できれば10分間でお話しいただくと2～3人の方々の質問の時間が取れるのではないかと思います。よろしくお願ひします。

先ほどの1巡目と同じように、伊東委員から回したいと思えます。よろしくお願ひします。

【伊東委員】

先ほど五百旗頭先生が品格ということをおっしゃられて、そういう徳が果たしてあるだろうかという問題に関して、小さな話ですが、私が最近経験したことで大変うれしい話がありますので、是非ご紹介させていただきたいと思えます。

私は7年間程、アートポリスというプロジェクトのコミッショナーをさせていただいております。これは県内の公共の施設を中心にして、知事が任命するコミッショナーが設計者を推薦するという、世界でも大変珍しいシステムで、今年で25年目を迎えます。まず、熊本が4代の知事にわたってこのようなシステムを継承しておられることに対して、熊本は、本当に悪い言葉で言うと頑固というか、持続する力がすごいと僕は感心しています。アートポリスは、若い設計者を熊本内のプロジェクトに推薦するというシステムですとやってきました。しかし、震災後、被災地では、先ほど五百旗頭先生がおっしゃったように、大変仮設住宅が貧しい。そこに木造の小さな、みんなが集まれるような小屋を熊本からプレゼントできないだろうかと考えました。「みんなの家」と呼んで、いくつか今も継続してつくっていますが、それをアートポリスの会議を通じて知事にお話ししたところ、知事が「それは大変にいい話だから、すぐに進めましょう」と木材を提供して下さって、資金面でも援助をして下さいました。そして、仙台市の宮城野区の仮設住宅内に、1軒の「みんなの家」をプレゼントしました。

住民の方々は大変喜んで下さったのですが、私にとって大変うれしかったのは、その家をプレゼントしたということではなくて、その後の問題なのです。その後、熊本県の方がたくさんそこを慰問に訪れて下さって、県議の方は一緒に写真を撮ってそれをラベルにしたお酒を送って下さったり、この間は熊本県の農家の方が玉ねぎを1トン、その自治会に送って下さったり。それから熊

本市内の高校の先生が、生徒たちと一緒に市内で義援金を集めてそれを送ってくださったり。そうやって、心のつながりができたということです。

これは熊本が、自分たちのことだけではなく、非常に温かい心を他県にまで及ぼしていくということです。これは、州都としての品格にかなり適合するのではないかと思います。

わたくしは先ほどブータンの話をしましたが、これはブータンの首都の近郊の写真です。非常に美しいですね。ここは、建物は5階建て以下という規定があります。それから、できるだけ歴史を継承するような建物を造っていく。九州全体くらいの土地に70万しか人口がありませんから、九州とは比較になりません。しかしブータンは幸せで世界一ということを目指すに当たって、具体的に4つの目標を掲げています。

1つは経済的に自立すること。2番目に環境を保護すること。3番目に文化や伝統の推進をすること。そして4番目に良き統治というこの4つを目標にして、それをさらに具体化するために、何年かに一度住民たちのアンケートをとります。精神面や、健康、文化面、地域性、環境といったような、一人5時間ぐらいのアンケートを細かくとるそうですが、それをまとめたものを、統治の正しい方向を定めるベースにしているという話を聞きました。

この4つの条件というのは、自然、歴史、文化、そして良き統治といった意味で、僕は熊本にも当てはまるような条件ではないかと思っております。今までアートポリスで単体の建築を紹介してきたのですが、是非これを新しい街づくりにこれからは適応していく。木材をふんだんに使った新しい街、先ほど甲斐さんがおっしゃっていたような森林の中に低層の街をつくっていくということなど。熊本だったら一番ふさわしい街ができるのではないかと思いますし、こういう街を是非、これからアートポリスで推進してやっていけたら素晴らしいと思います。

そしてまた熊本には、例えば先だって球磨工業高校を訪れましたが、この高校の生徒さんは、素晴らしいです。家など大工さんよりよほどきれいに造ります。これからの教育は、農業大学校などもそうですが、単に頭で考えるだけではなくて、手を動かしてものをつくる。そして目の前に森があって、森を育て、木を切って、乾燥して皮をむいて、そこから家を造るというそうした中で教育を行うことは、とても大事なことだと思います。そういうことと組み合わせると、熊本の新しい街ができたら本当にすごいと思います。

【蒲島議長】

ありがとうございました。今の球磨工業高等学校の話がありましたが、昨日高校生40人を連れて東大に行って参りました。東大の中で都道府県の名前がついたのはおそらくそこだけだと思いますが、東大の工学部の中に熊本テラスというところがあって、それを寄付したのです。その木材を寄付したのですが、その木材とともに球磨工業高等学校の方々がテーブルと椅子と、それからさまざまな備品を作ってプレゼントして下さって、大変喜ばれています。では次は、甲斐委員お願いします。

【甲斐委員】

まず、骨格案についてですが、先ほど田川会頭が指摘された九州財界との関係づくりといったところも、私も同じく最初に気が付いたところです。経済界から見ておまして、いわゆる知事のオランダでの特徴の表現法を拝借すると、他県から愛される州都づくりといった観点、あるいは前回、田川会頭が言われた福岡が長男で、熊本が次男坊として、業界や団体の事務局的な役割を担うといったような関係づくりをすることが必要であるといった観点。これは私どもの、いわゆる熊本の人たちの九州の他県を意識した、九州全体を考えた考え方やり方、受け取り方、過ごし方そのものを見直していかなければならないというテーマになろうかと思います。ですから、これはやっぱり一人一人が努力してやっていかなければいけない非常に重要なテーマではないかと思います。

それと事務局的役割というのは、これは組織運営能力、あるいは調整能力のブラッシュアップが必要であろうと思います。いろいろな利害関係を調整していきながら、全体最適的な観点にまとめていくというのは、かなりパワーがいることではないかと思います。それが、第1点です。

第2点は、経済的視点が抜けていると思います。危機管理的視点のところを含まれているような書き方ですが、危機管理的視点は、有事の体勢であり、平時の経済的視点をやはり入れるべきではないかと思います。と申しますのは、知事は期待で経済は動くとおっしゃいました。実際にその通りだと思います。しかしながら、デフレ期待の時代は実現可能性の検証に非常に経済はシビアになります。ですから、そういう意味において、今の経済活動レベルでは、豊かさを、幸福を実現できるようなものをつくり上げていくということは、かなり難しいのではないだろうかという問題意識は必要ではないかと思います。

それと3番目が、危機管理視点に好材料として追加していただきたいのは、熊本の産業構造そのものが域内循環型、つまり自給自足型の産業構造です。この構造があるから、熊本は基本的に豊かになると思います。いわゆる自分たちでさほど困らないで、その生活が維持できていく。つまり、水や食料や住まうところといった土地も含めてですが、それはライフライン産業と定義するならば、そのライフライン産業の充実ぶりは大したものだと思います。

そしてもう一つメリットとして、追加してほしいのが治安です。日常生活における治安の良さ、あるいはその治安の維持を図っていくということ、これは大事なことではないかと思います。

以上が骨格案についてですが、その中で取組みの方向性について、意見を四つほど言わせていただきます。

まず、自然と社会とその生活との調和という観点から、地殻変動や気候変動への備えは、もちろん大変重要なことではあります。その備えのプロセスで観光資源を意識した治山治水事業といったような、要するに複合的な観点が必要ではないかと思うのが第1点です。特に熊本には目に見えない自然、つまり地下水とか温泉とか目に見えない自然がありますから、その恵みをどのように生かしていくのかという観点が必要だと思います。

次にいわゆる自然に関して、代替可能エネルギーとしての太陽光発電はもちろんですが、中小水力発電、あるいはバイオマス。中小水力発電に関しましては、熊本は湧水池がたくさんあります。いろいろなところに水路があります。そういった水路を生かした中小水力発電が可能ではないかと

思います。その発電設備も、例えば今熊本市が、「熊本水物語」というペットボトルを作っていますが、そういったペットボトルの製造施設と兼ねて設置するとか、そんな複合的な見方が必要だと思いますし、バイオマスについては、林業の振興を意識したバイオマスにもっていく必要があるのではないかと思います。

2番目に、幸福を実感できる産業政策と危機管理対策として、やはり農業と漁業の振興政策は不可欠だと思います。特に農業とITをいかに組み合わせるかということが、今後の農業経営にとって非常に重要だと思いますし、農業を振興していくためには、その素材を生産する周辺に食品製造業を充実していかないと対外的な付加価値はなかなか得られません。こういう構造を認識して、食品製造業を成長戦略産業として位置付けるといった考え方も必要ではないかと思います。

3番目に、品格へつなぐ美しさの基準づくりという観点でお話をさせていただきますと、住宅や建築物、あるいは施設など目に見える構造物と、デザインや、素材、色彩などに関する統一性とその一貫性を示すと、街全体が一つに集合美を形成して非常に印象深い街になるのではないかと思います。地中海の、例えばギリシャの都市であるとか、あるいはパリの街並みであるとか、いわゆる統一性、一貫性が石文化であるがゆえに形成されていると思いますが、木の文化でそういうことが形成できないかといった観点も21世紀的ではないかと思います。そして、素材にはできる限り県産材を使うようなトライが必要ではないかと思います。

それともう一つ、これは笑われるかもしれませんが、品格のある豊かさの表現として、個人としてTPOに応じた衣服文化、服、これをやはり意識する。もともと熊本は、昭和50年代まで縫製工場が各地にありました。それが、中国に行き、ベトナムに行き、カンボジアに行きというふうにならなくなってきているわけです。いずれ、購買力平価ではありませんが、製造価格自体がそんなに変わらなくなってくると思います。30年後を私は今意識してお話しておりますが、そんな中で人吉シャツに代表されるような優秀な職人が残っているうちに、そういったTPOに応じた衣服文化というものを形成していくということも、一つ品格のある州都づくりには有効なのかなと思います。自身もそうなんですけれども、だいたい背広とゴルフウェアとパジャマの3つのパターンしかないような方が多いと思いますが、それにバリエーションを持たせるというのも一つの手ではないかと思います。

最後に教育制度についてであります。アジアとつながるという知事のその目標を実現していくために、教育の世界でアジアに対する地理や歴史、あるいは文化に対する教育プログラムがどれほど充実してきているのでしょうか。これをやはり充実させて、アジアに対する知識を、義務教育の段階から着実にレベルを上げていくといったような方策は必要だと思います。また、アジアからの留学生をできる限り受け入れるという姿勢において、奨学金制度自体をもう少し行政が踏み込んで制度設計されると、アジアとつながるというアジアへの情報発信が若者に向けてなされていくのではないかと思います。いずれにしても、熊本というところの気風が個人を非常に尊重する風土だと思います。そういう風土をベースに、自己完結型の社会の充足感が我々の周辺にはあります。そういう状態である我々が、可能性という外への広がりを持った、その積極的自由を持っている人たちをどれだけ人材育成していくかといった観点というのは、非常に大事なことではないかと思います。以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、続けて御厨委員からお願いします。

【御厨委員】

2順目ということでございますので、今までの議論を伺っていてこんな感じかなというのを簡潔に申し上げます。

私は最初に地図の上で考えるというように申し上げましたが、これはかなり大事であり、面白いことであって、先ほど今私の前で甲斐さんが縷々述べられたことというのが、地図の中に落とし込んでおそらく考えられることでありましょう。言葉の使い方には気を付けなくてはいいませんが、やはり熊本というものが九州全体で持っている、あるいは日本全体で持っているその地政学的な視点というものを少し入れて、これを明確にしていくということが大事です。それで産業や農業などいろいろなお話が出てきましたが、要するにそれでもどうやって他の九州の諸県と共有していくことができるのかということだろうと思います。言葉遣いの的に言うと、州都構想の中には出てこない言葉ですが、おそらく熊本というのをどうやって開いていくかという話。私は開くという表現でいいと思うのですが、一つは九州に開く、日本に開くということ、それから甲斐さんが先ほどおっしゃったことに付け加えて言えば、アジアにどうやって開いていくのかということを含めて、それから知の集積をなさるといっても、その知の集積されたものをどうやって開いていくかという観点に加わると、州都構想が何となく熊本が手を挙げますという話ではなくて、開いていくという構想の中から自然に見えてくるものがあるのではないかと思います。なかなかこの開くというのは、言葉の上では簡単ですけども、やはり自信がないとできないことであって、熊本というのは僕は自力というものがあると思いますから、おそらくこういう形でいろんなところへ開いていくということを州都構想の一つと考えることが重要なのではないかと考える次第です。くまモンが、既に熊本を開いているという面もあるわけですから、あのくまモンを単にかわいらしいというだけではなくて、もう少し付加価値をつけるとか、そういう広報をしていくことも大事ではないかと思っております。以上です。

【蒲島議長】

五百旗頭委員、お願いします。

【五百旗頭委員】

初めて熊本に来たときもそうでしたが、昨日も阿蘇の方を車で行き来して、熊本の自然の彫の深さというのですか、何か植生が違いますね。水が豊かだという地下の状況も大変な恵みですが、黒くよく樹木、植物が茂り、そして根深い感じですね。本当に豊かな地だなと思います。災害視察に行くと、爪痕のすさまじさを見て、それに対してしっかりと知事が先頭に立って対処する。この地、人について言うなら、自然は彫が深く、人々は大変に郷土愛を持っている。知事以下職員の方は、全力投球の姿勢を持っている。それが広がりを持って、ボランティアの人が直ちに駆けつけて行く。昨日でボランティアが終わったようです。ボランティアセンター経由のもの、つまり民家が泥でやら

れたのが、ボランティアの皆さんの頑張りのおかげで済んだのです。これから、農業部門が大変です。ビニールハウスをどうするのか、気が遠くなるようなことです。そして、農地に土が被りました。ひどく土が被ったところは、稲がなくなって茶色になっているのです。ところが、あるところからは、緑が見えてきた。「どうしたのだ。ここは、来なかったのか。」「いや土砂が低く来たので稲がそれを突き破って頭を出しているのです。」稲はたくましいのです。大きくやられるとつぶれてしましますが、10センチ、15センチ位だったら、根の方からまた青々と伸びてきて、もう稲の穂をつけかけているのです。そういうものをそれぞれに対処していかなければならない。そのためのこの力はどこから来るのかというのが気になります。これまでのところ、ボランティア活動が活発に行われて、私は県立大学の理事長として、県大の学生や教職員がよくやってくれたというのを誇らしく思います。

熊本県立大学にきて一番思ったのは、本当に地域密着型だということです。和水町の里山を復活するという活動を、学生が和水町やあるいは企業と一緒にやっていてという現場を見せてもらって感銘を受けましたし、この熊本の彫の深い自然が生み出す食材を使っての新しいレシピを作る取組みを、高校生も一緒になって行っています。すばらしいと思います。こういう地域に深く足をおく側面に加えて、もう一つ世界水準のアイデアのようなものが組み合わさったときに、すごいものになると思うのです。知事が前回のお話で首都の在り方に三つのタイプがあるというふうなまとめられました。そういう議論は、大変大事だと思います。

今、このように大変すばらしいシンポジウムをしていただいておりますけれども、次の段階としては外国のその種の専門家、ニューヨークとは違ってワシントン D.C. なんだとか、あるいは蒲島さんが若い頃あちこち行かれた中で、アメリカのステートの中で大都市ではない首都を置くという観点に立っているような首都を含めたパネリストを呼んで、国際会議を開くとか、つまり知的な水準というのを広く高く持ちながら、この熊本というのをつくり変えていくというのが一つの大きな課題ではないかと思います。

先ほど田川さんがおっしゃった多極分散型九州の発展という提唱を、私はなるほどと思いました。やっぱりこの地において経済界の活動を長くやっていらっしゃる人は、洞察が深いと思いました。熊本が立派になるということは大事ですが、それが独り善がりになるとか、上から一方的に与えるような立場になると意外に周りにとっては重苦しいものですよね。双方に負担になってきます。戦前の偉い政治家に原敬というのがおりますが、原敬は、田中角栄や小沢一郎の元にもなっていると言われることがあります。それはいろいろな人がものを頼みに来て、原敬はそれに対して、お金が要るのならと言って割とあげるのです。田中角栄みたいな雰囲気なのです。ところが原敬は、頼まれごとをするとそれにできる限り応じるのですが、それを受けた後に、「それじゃ君すまんけどなあ、俺の方から実はこれちょっと君に頼みたい」というお返しをお願い事をよくしたんですね。これはなかなかのものだと思うのです。あげまくって「貸しつかったぞ」と、「今度俺の言うこと聞けよ」と。こういうのが恩顧主義、クライエンテリズムという体質になるわけです。子分にならざるを得ない。未だに小沢さんに従う人はお世話になったからと言う人は少なくありませんが、原敬はある意味でそれを越えたかったわけです。私は確かに頼まれてやって、それは政治的支援かもしれませんが、逆にこっちからもちょっとしたことをお願いしてやってもらった。それは、人として相応性を持ってやっ

ていく。

この間小泉さんが、防大校長が終わった時に慰労会をしてやろうということでお食事してくれたのですが、彼が「自分が政治家をやってきて、ものすごく面倒見てやった、こいつは世話してやったと思うやつがよく裏切るんだ。」と言うんですね。それはやっぱり、こんなに世話してやったというのは重いんでしょうね。受ける側にとってはやりきれないところがあるのでしょうか。そうではなくて、自分としては何でもなく、それなりにお付き合いしていたと思う人がすごく助けてくれたりすると言うのです。そういう自然なやり取りの中で、相応性を持って協力する。特にこれからの時代はそういうことが大事です。熊本が周辺の各県とそういう、ある種軽みを持って、総合的なインターアクションになるようなお付き合いができればと思います。

【蒲島議長】

どうぞ、小野委員お願いします。

【小野委員】

やっぱり防災とか災害のお話で恐縮なのですが、この次は、僕は州都は学園都市であるということが必須だと思っていますので、そのことをお話します。

県が地域防災計画というのを作っておられて、非常に厚い資料で、皆さんご覧になったと思いますが、災害ボランティア計画という項目もございます。先ほどちょっと県立大学の話に出ましたが、やはりボランティアの主役は大学生であります。この大学生をどれだけうまく使うのか、うまくボランティアで活躍していただけるかということですが、私はそのモデルをつくって九州全体に広げることができるのではないかと考えています。

今回の阿蘇もそうですが、一時避難場所は小学校です。ごく近いから避難できるという、それはそれで私は非常に重要だと思いますが、体調を崩したとき、病院に行こうと思っても病院は満床です。もう溢れています。どうにもなりません。その時にどうするかという二次的な、保健医療的なことが加味できる避難所をつくる必要があるのではないかと私は思っておりますが、実はそれは大学であります。特に保健医療福祉関係の大学では、大きな役割ができると思います。手前味噌になりますが、熊本県保健科学大学には、学生の実習のために酸素さえあれば酸素を供給できるベッドが90以上あります。そして、教職員は医師免許を持っている者が10名以上おります。看護師、その他に至っては、かなりの数があります。そこに緊急の時には、一時避難所から送っていただいて、そこで病院ほどではないですが、うまくケアができるのではないかと。そういうモデルがつけられたらと思っております。もちろん学生も高学年になりますと、医療の知識を持っていますし、嚔下障がい対応だとか酸素吸引だとか、災害であれば許されることができる可能性があります。各大学には、AEDももちろん備わっております。そして九州各県全域に、この保健医療避難所というのを熊本から発信してつければ、私はかなりの有効性があると思います。熊本には、高等教育コンソーシアムができておりまして、14の高等教育機関があります。これにプラスして、保健医療の専門学校もあります。そのコンソーシアムなどを利用して医療関係でなくても、ボランティアとしてい

つも体制が整えられるような教育ができれば、私は極めて大きな組織ができると思いますし、それは若者にとって危機意識を持ってもらうためにも極めて重要ではないかと思っております。

先般、2009年にインフルエンザパニックが起きました。私どもは、高等教育コンソーシアムでいろいろな検証をさせていただいて、本まで作ったことがございます。その中で小学校から高等学校までの中では、いろいろなことが起きましたが、一番活躍したのは養護教員の先生です。大きなところは二人おられ、小さなところは一人だけですが、この小学校の一時避難所に養護教員の先生がいるのです。これをもう少し厚く対応というのは、経済的な対応ではありません。養護教員の先生の中に、看護師の免許を持っている人がいても小学校ではその腕を磨くことが出来ません。ペーパードライバーみたいな存在です。もちろん研修会とかいろいろなネットワークもあるのですが、二人のうち一人は看護師の免許を持った養護教員を雇って、その一人は年間2カ月ぐらい、例えば日赤に行って、臨床のことを忘れないように、あるいは救急処置ができるようなことをすれば、学校でもより有効に機能しますし、場合によっては一時避難所だってそれは極めて大きな効果を持つでしょう。もちろん養護教諭の方々を疲弊させないようなシステムは必要なのですが、そういうふうにして、一時避難所、それから高等教育機関、専門学校を含めた二次利用的な避難所をつくるということが私は今から大切ではないかと思っております。そしてそれをもう少し地域に広げるともう少しまいボランティア計画が検討されて、役立つのではないかと思っております。

地域という概念がありますが、学校もまさに地域ですから、学校が地域として機能する。その周りの自治体、自治会とかそういう方々に活躍していただく地域社会とどうやって連携できるか。そこには、もう一つ看護師や保健師の免許を持った人たちが、うまく機能する。そういうシステムをつくるのが非常に大きなやるべきことになるのではないかと私は思います。このモデルをつくっていただいて各県に広げる。各県にもコンソーシアムができておりますので、そういうネットワークができれば、非常にありがたいと思っております。この次は、もう少し学園都市としての大学をお話しますが、今日は災害避難所の拠点としての大学についてだけお話をさせていただきました。

【蒲島議長】

ありがとうございました。それでは、田川委員をお願いします。

【田川委員】

最近の政治情勢を考えると、今の国会の動きは、いわゆる解散風が非常に吹き始めておりますが、現状でいきますと、一党で単独過半数をとる政党はないというのがまず大方の見方です。そういう中で、橋下大阪市長が中心となって維新の会がもしかしたら第二党になるかもしれないという動きの中で、あそこが掲げている中に道州制度推進というのがいきなり出てきます。これまでの民主党の動きの中で、道州制についてはほとんど動きませんでした。それが、おそらく総選挙が11月頃と言われておりますが、そうなりますと道州制というものが本当に現実のものとして我々の前に出て来る可能性はあります。

遠い将来のことだと思っていたらほとんど間に合わないという気がして、そういう意味では知事

がこの段階で「州都」を挙げたというのは、僕はまさに前日も申しましたが大成功であると、本当の確な判断であると思っています。道州制論議が今後さらに強まってくる状況の中で、私たちはそれを見ながら、熊本としてどのような形でそれに対応していかなければならないのかということを考えなければなりません。先ほど九州各県の話を行いました。特に州都をどこに持って来るのかというのは、本当に各県にとって今後発展するかしないかの死活問題なのです。であればこそみんな自分のところに持って来たいと思いつつ、じつと我慢して周り近所を見ながらやっているという状況です。先ほども言いましたが、みんなが黙ってしまったら、気付いたら福岡が州都になるというのは、これはもうほとんど一致した見方です。先日も福岡の方と話した時に、福岡は経済も政治もとは思っていませんよという話をされる方もいらっしゃいますが、福岡としてはこのまま、この場は何も起きずという形でいくのが最高だということではないかと思います。おそらく戦略だと思いますが、それほど各県の今後の発展を握るのがまさにこの州都であると思います。いずれにせよ先ほど甲斐さんもおっしゃられたように、人口が今後減っていく中で、熊本をどうやって打ち出していくのかというのは、まさにここにかかっていると思うのです。

その意味で、州都を熊本に持って来るというときに、各県の政界、行政、経済界、そして一般の県民の皆さんが、熊本がいいねというふうに持って来るかというのは、相当の覚悟と戦略が必要だと思います。そういうことからすると、熊本の強みとかいろいろこれまで論議した中で、熊本のアイデンティティを高めるといことはもちろんですが、それだけでは達成できないと思うのです。九州という発想の中で熊本に州都をいかに持って来るかというところを考えていかないと、先ほども言いましたが他県からの賛意は得られないと、僕は思っています。そういう意味では、州都の構想、骨格もありますけれども、九州知事会や九経連などが、九州のグランドデザインを描いていますが、これというのは出てきていません。九州のグランドデザインというか、九州の成長的な戦略の中で熊本から見た九州の成長戦略を考えて、その中できちんとした形で州都を熊本に位置付けるという発想が一番大事だと思うところなんです。

もう一点は、結局その時に熊本は、全九州を見た中で、交通の利便性が極めて良く、しかもなおかつ結構空いている土地をきちんと確保しておく必要があると思います。

あともう一点は、九州の戦略性という発想の中で、どういうことかと申しますと、まず経済の中心はここですよ、政治の中心はここですよ、農業の中心は 県ですよ、観光は例えばどこですよというような形での、九州全体の協調と言いますか、多極的な分散というのはまさにそのことだと思います。やはりそういうことを私たちは念頭に置きながら、今後この州都構想を実現していかなければならないと思っております。前と若干重なりましたが、以上です。よろしくお願いいたします。

【蒲島議長】

ありがとうございました。2順目が終わりましたが、皆様のご協力のおかげで、予定よりも5分早く終わりました。そこで私に3分いただければ、最後にコメントしてそれから質疑応答に入りたいと思っています。

先ほど田川委員の方から、国政の状況についてお話がありましたが、私は全く同感です。国政

では道州制の議論が極めて重要な課題として浮上してくると、私は思っています。

それでは九州全体ではどうか。九州知事会に出ておられますと、九州広域行政機構というものをつくって、国の出先機関をみんな引き受けようという動きがずっと続いておられて、そして全ての県とは言いませんが、ほとんどの県に、九州は一体ということがかなり浸透しているかと思っております。だから、道州制に対しての九州知事会の方向性としては、もしそれができた時は、歓迎するという状況だと思っております。

では県はどうか。私は県政の4つの重要課題の一つに、この「百年の礎」と道州制を持ってきたことがとてもよかったと思っております。なぜならば、県庁がその資源を集中してこれに投入することができるからであります。多分、日本広しといえども県政の4大目標の一つに道州制を見据えた「百年の礎」を掲げているというのではないのではないかと思います。それだけ重要な県政課題として位置付けているわけです。委員の方々にこうやって議論していただくのは、まさにそれをもっと進めるためであります。そういう意味では、国政、九州全体、県の取組みは全く同じ方向に向いております。後はどのように熊本県が州都に選ばれるか、その準備をしておくかということが大事だと思うのです。準備しておかないで、どうぞ私を選んでくださいと言っても、絶対だめです。私が知事になる前に九州の知事さんたちは、道州制の議論はするけれども、州都の議論はしないという暗黙のルールがあったようではありますが、私は後で知事になりましたので、暗黙のルールは知らなかったということで、堂々と議論をしております。

それから、この州都の中でとても大事なことは、知の集積ということが言われておりますが、今日、とても素晴らしく、またうれしいニュースがありました。ホンダの二輪車の研究開発部門が全て熊本に来るということです。ソニーが研究開発部門を熊本に持って来て、ソニー全体は業績が悪いけれども、熊本のソニーは非常に業績が良いです。そういう意味では、ソニーとホンダという世界に名だたる研究開発部門が熊本に来るということは、知の集積が少しずつ始まっていくと思います。そういうものも含めて州都の議論を展開すればするほど、そういう流れが熊本に来るのではないかと私は確信しています。

先ほど期待の政治と言いましたけれども、期待によって経済が動くという部分がとても大きいと思いますので、そういう意味では確信を持ってこの議論を進めていくべきだと思っております。少しでも疑問があると先に進まないんです。きっと道州制が実現すると思います。そして道州制が実現したときに必ずや州都の戦いになります。その準備を今進めている段階であると私は思っています。

10分ほど質疑応答の時間が取れますので、会場の中でこれだけは質問しておきたいという方がおられましたら、委員の皆さま、また私を含めて回答できるところは回答いたしますので、手を挙げて質問していただければ、今マイクを持って来ます。

【蒲島議長】

日本的な会議ではなかなか会場から手が挙がりませんので、最初どなたかおられますか？

せっかくこれだけのメンバーの方々がそろわれましたので、どうぞ質問していただければ幸いです

す。いいですか？

それでは委員の方々に、これだけは言っておきたい、言い足りなかったことがあったら、1、2分で言っていただければ幸いです。

はい、それでは質問もないようでありますので、これで未来会議を終わらせていただいてよろしいでしょうか？

長時間にわたり、ご意見ありがとうございました。この未来会議は、県政にとっても私自身にとっても大変貴重な時間です。今日いただいたご意見をまた事務局でまとめて、州都構想の骨格にしたいと思っております。そして、今回はこの議論を基にたたき台をつくって、次回また未来会議を行いたいと思います。本日は、ありがとうございました。では、事務局の方に返します。

【事務局】

委員の皆さま、長時間本当にありがとうございました。議事録は、後日県のホームページに掲載させていただきたいと思っております。それでは、先に委員から退席させていただきます。傍聴者の方はしばらくお待ちください。

【蒲島議長】

一つだけ、伊東先生にお礼申し上げたいと思っております。伊東先生は、明日海外にいらっしゃるということで、今日は日帰りで来てくださいました。ご多忙中、ありがとうございました。

(拍手)

【事務局】

ご協力ありがとうございました。それではこれで終了いたします。